

牛乳房炎由来環境性レンサ球菌の薬剤感受性と耐性遺伝子保有状況調査

加藤貴誉湖^{1)†}白井幸路²⁾小池新平³⁾

1) 栃木県県央家畜保健衛生所 (〒321-0905 宇都宮市平出工業団地 6-8)

2) 栃木県農政部畜産振興課 (〒320-8501 宇都宮市塙田 1-1-20)

3) 栃木県県北家畜保健衛生所 (〒329-2747 那須塩原市千本松 800-3)

(2022年11月9日受付・2023年8月14日受理・2023年11月14日公開)



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/76/11/76_e297/_article/-char/ja

要 約

環境性レンサ球菌 (OS) による乳房炎は適切な抗菌性物質選択による治療が重要だが、国内の薬剤感受性状況の報告は少ない。そこで、2010～2012年 (前期) 及び2016～2018年 (後期) に栃木県内の乳房炎罹患牛から分離された OS96 株 (前期: 49, 後期: 47) について、薬剤感受性及び耐性遺伝子保有状況を調査した。前期後期ともに分離 OS 株の4割以上が *Streptococcus uberis* であった。また、テトラサイクリン (TC) に対しては前期で9.5%、後期で36.4%、ピルリマイシン (PLM) に対しては前期で14.3%、後期で31.8%の株が耐性を示し、後期の方が両薬剤に対する耐性菌の割合が高かった。TC 及び PLM については、耐性遺伝子 (*tet(O)*, *tet(S)*, *tet(M)* 及び *linB*) 保有と薬剤耐性がおおむね一致し、薬剤耐性に耐性遺伝子獲得が関わることを示唆された。さらに、エリスロマイシン (EM) 耐性 *S. uberis* では耐性遺伝子 *erm(B)* 保有株が確認され、EM だけでなく PLM の最小発育阻止濃度も高い傾向が認められた。——キーワード: 薬剤耐性遺伝子, 薬剤感受性, 環境性レンサ球菌, ピルリマイシン, *Streptococcus uberis*.

-----日獣会誌 76, e297～e303 (2023)